# 「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」の開発

研究代表者　米沢　　崇（学習開発学講座）
研究分担者　井上　　弥（学習開発学講座）
鈴木由美子（学習開発学講座）
伊藤　圭子（初等カリキュラム開発講座）
山崎　敬人（初等カリキュラム開発講座）
池田　吏志（初等カリキュラム開発講座）
大後戸一樹（初等カリキュラム開発講座）
中村　和世（初等カリキュラム開発講座）
永田　忠道（初等カリキュラム開発講座）
松浦　武人（初等カリキュラム開発講座）
竹谷　浩子（教育実践総合センター）
松宮奈賀子（初等カリキュラム開発講座）
幸坂健太郎（初等カリキュラム開発講座）

## Ⅰ　研究の背景・目的・方法

### １．研究の背景

（１）社会的背景

2012 年８月に中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」が提言され，学び続ける教員を支援するため，大学の知を活用した現職研修の充実を図る仕組みを構築することなどが示されている。また，ベテラン教員の大量退職による新規教員採用者数の増加に伴い，初任者の資質能力を教育センターでの校外研修や赴任校での校内研修等によって形成していくことが従来以上に求められている。特に，校内研修を中心とした初任者研修指導教員（以下，指導教員）の日常的な指導・支援が初任者の力量形成に大きな影響を与えると考えられ，指導教員を支援するためのツールの開発が求められている。

（２）これまでの取組と課題

そのような中，広島大学では，平成 25-26 年度独立行政法人教員研修センター委託事業「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」の「学び続ける教員の基礎・基盤を構築する初任者研修支援プログラムの開発」に採択され，広島県教育委員会及び広島県立教育センターと連携・協働した取り組みの１つとして，指導教員が初任者の指導を行うにあたって有用な「初任者支援ハンドブック（小学校）」を開発した。この「初任者支援ハンドブック」は，学習規律，実態の把握，教材研究，授業の分析・評価，学習指導案，発問，板書，机間指導という計８項目から成り，これらの項目について，指導教員が初任者を指導する際に有用な情報を提供するツールとなることを目指して開発された。

しかしながら，上記のハンドブックでは，各教科・領域などの具体例をあげて，初任者

が各教科の授業を行う際の，実践的な指導に活用できる情報を提供するには至っていない。

## ２．目的

本研究では，各教科・領域などの具体例を挙げて，指導教員が初任者の授業力向上に向けた実践的な支援を行うに当たって有用なツールとして「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」を開発することを目的とする。このような各教科・領域に即した具体的なハンドブックがあることで，指導教員は，初任者を指導する際に活用する，各教科・領域についてのより実践的な情報を得ることができると考えられる。

## ３．方法

ハンドブックで取り上げる各教科・領域は，算数科，社会科，体育科，図画工作科，外国語活動とした。執筆に際しては，各教科・領域を専門とする研究分担者（各項目１名）に執筆を依頼した。

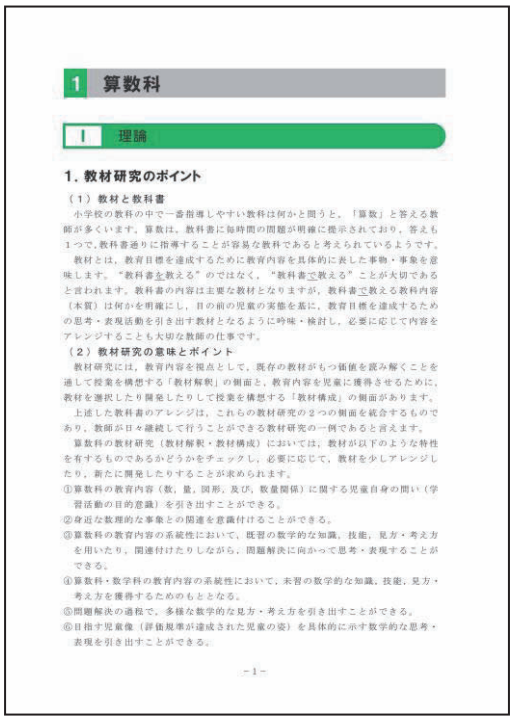
研究分担者が執筆した各項目の原稿については，計４回のＷＧを設け，内容や体裁について討議を行った。最終的には，研究分担者全員の合意を得，研究代表者が体裁を整えて最終的に１つのハンドブックとした。

（井上　弥・鈴木由美子・竹谷浩子・米沢　崇*）

## Ⅱ　作成したハンドブックの概要

本研究によって開発した「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」を，図１・２として示す。

図１　「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」表紙



1 算数科

I 理論

1．教材研究のポイント

（1）教材と教科書

小学校の教科の中で一番指導しやすい教科は何かと問うと，「算数」と答える教師が多くいます。算数は，教科書に毎時間の問題が明確に提示されており，答えも1つで，教科書通りに指導することが容易な教科であると考えられているようです。

教材とは，教育目標を達成するために教育内容を具体的に表した事物・事象を意味します。“教科書を教える”のではなく，“教科書で教える”ことが大切であると言われます。教科書の内容は主要な教材となりますが，教科書で教える教科内容（本質）は何かを明確にし，目の前の児童の実態を基に，教育目標を達成するための思考・表現活動を引き出す教材となるように吟味・検討し，必要に応じて内容をアレンジすることも大切な教師の仕事です。

（2）教材研究の意味とポイント

教材研究には，教育内容を視点として，既存の教材がもつ価値を読み解くことを通して授業を構想する「教材解釈」の側面と，教育内容を児童に獲得させるために，教材を選択したり開発したりして授業を構想する「教材構成」の側面があります。

上述した教科書のアレンジは，これらの教材研究の2つの側面を統合するものであり，教師が日々継続して行うことができる教材研究の一例であると言えます。

算数科の教材研究（教材解釈・教材構成）においては，教材が以下のような特性を有するものであるかどうかをチェックし，必要に応じて，教材を少しアレンジしたり，新たに開発したりすることが求められます。

①算数科の教育内容（数，量，図形，及び，数量関係）に関する児童自身の問い（学習活動の目的意識）を引き出すことができる。

②身近な数理的な事象との関連を意識付けることができる。

③算数科の教育内容の系統性において，既習の数学的な知識，技能，見方・考え方を用いたり，関連付けたりしながら，問題解決に向かって思考・表現することができる。

④算数科・数学科の教育内容の系統性において，未習の数学的な知識，技能，見方・考え方を獲得するためのもととなる。

⑤問題解決の過程で，多様な数学的な見方・考え方を引き出すことができる。

⑥目指す児童像（評価規準が達成された児童の姿）を具体的に示す数学的な思考・表現を引き出すことができる。

－1－

II 事例

1．学習指導案作成例（第4学年「面積（複合図形の求積）」）

（1）本時の目標

必要な辺の長さを調べ，複合図形の面積を工夫して求めることができる。

（2）本時の学習展開

| | 学習活動（・児童の反応例） | ○指導上の留意点【評価（観点）】 |
|---|---|---|
| 既習事項の想起 | 1 長方形と正方形の求積方法と意味をふり返る。<br>・1cm²が縦に3個ずつ2列あるから，3×2で6cm²。<br>・1cm²が一辺に3個ずつあるから，3×3で6cm²。 | ○複合図形の一部分（長方形，正方形）のみを示した状態で，面積を問う。<br>○なぜその式で面積が求められるのかを問うことによって，求積公式の意味を含めてふり返ることができるようにする。<br>○方眼（1cm²）の数を数えずに工夫して求める方法を考えるように促す。<br>○長方形や正方形の面積であれば求められることを確認する。 |
| 課題把握 | 2 本時の課題（複合図形の面積を工夫して求めること）を把握する。<br>・あっ，長方形ではない，L字型だ！<br>・どのように面積を求めればよいのだろうか | |
| | L字型の面積を工夫して求めよう。 | |
| 自力解決 | 3 面積の求め方を考える。<br>① 3×4＋3×2＝18cm²　② 3×7－3×2＝15cm²<br>③ 3×7－3×4＝9cm²　④ 3×3＋3×3＝18cm²<br>⑤ 3×3＋3×3＝18cm²　⑥ 3×6＋3×3＝27cm² | ○解決の見通しを持ちにくい児童には，以下のような手だてを講じる。<br>・「L字型の図形の中に長方形や正方形が見えないか」と問う。<br>・ヒントカード（補助線を挿入した図）を示す。<br>○図，ことば，式を用いて，自分の考え方をできるだけ分かりやすく表現するように促す。<br>○多様な方法を考えるように促す。○表現一部のみ発表させて，図と式を関連付けたり，ことばと式を関連付けたりする活動を通して，個々の見方・考え方について共有し，理解を深めることができるようにする。<br>【他児童の図や式から，その求積の方法・工夫についてことばで説明することができる。（数学的な考え方）】 |
| 集団解決 | 4 多様な求積方法・工夫について共有し，理解を深める。<br>・～さんは，図をこのように2つの長方形に分けて，面積をたしたのだと思います。<br>・～くんは，この出ている部分を動かして，3×10と計算したのだと思います。 | |

－6－

図２　「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」本文（抜粋）

## １．全体的な特徴

算数科，社会科，体育科，図画工作科，外国語活動のそれぞれの項目について，「Ⅰ　理論」編と「Ⅱ　事例」編を区分した。前者の「Ⅰ　理論」編には，各教科の授業を行う上で必要な要素（教材研究，学習指導案作成，発問，評価，板書，学習規律等）を選定し，それぞれの要素を授業で扱う上でのポイントを示した。後者の「Ⅱ　事例」編では，「Ⅰ　理論」編で示したポイントを踏まえ，特定の単元における学習指導案作成例や板書例など，より具体的な事例を示した。

## ２．ハンドブック各項目の執筆意図・特徴

（１）算数科

算数科の内容については，教科の特性から，特に以下の点を強調して執筆した。

・身のまわりの全ての事物事象に，数・量・形が存在する。算数の教材解釈や教材構成においては，児童にとって身近な数理的な事象との関連を図ることが可能であり，また必要であること。

・算数科における思考・表現活動では，記号，言語，図・表・グラフ，半具体物による操作，現実の事物・事象など，抽象度の異なる様々な表現が用いられる。算数科の学習において，児童の豊かな思考･表現を引き出し，学習内容の深い理解を図るには，上述した算数科における表現の特性（多様性）を活かし，意図的に抽象度の異なる表現に置き換えたり，複数の表現を関連づけたりする活動の充実を図ることが必要であること。

・教科内容の系統性が明確な算数科においては，診断的評価，形成的評価，総括的評価の結果を細やかに指導に反映させることが極めて重要であること。

・集団解決の場で出された多用な考え方について吟味・検討する場（練り上げ，練り合い）

においては，それぞれの考え方のよさについて話し合う，一般化可能な方法について話し合う等，吟味・検討（練り上げ，練り合い）の方向性も多様であり，その方向性を明確にしておく必要があること。

（２）社会科

社会科の面白さは教師と児童で，学習対象とする内容について，自分たちなりに調べたり考えたりしたことの意見交換を行いながら，現実の社会や地理や歴史の実態を解明していく点に見いだすことができる。初任者が児童と，社会科の授業や学習の面白さを感じながら教科指導を進めて行くための留意点として，小学校４年生の単元「災害から人々の安全を守る消防」を事例に，教材研究と学習指導案作成，発問，評価，板書やノート指導について，それぞれのポイントを示した点が，本項目の特徴となっている。

社会科の教育内容は教師が個人的に調べれば調べるほど，授業内容が豊富になりすぎてしまう側面も持ち合わせている。教師による事前の教材研究はあくまでも，児童と共に題材を追究していくための下調べと捉え，その教材研究と児童の社会経験を結び付けていく授業構成と学習展開が求められる。その際に，教師の教材研究と児童の社会経験を切り結ぶ大きな手立てが発問であり，授業における主発問に関連する形で黒板上に本時の目標が記載されて，児童の意見交換の結果が黒板上に整理される形で明示されていくことが理想的である。授業の中での児童の発言を中心に整理された板書とノートは実は，本時での到達目標に達しているかどうかを見極める評価の素材にもなる。この一連の単元と授業を自然に展開できる姿を目指して，研鑽を重ねるような初任者の成長を期待するところである。

（３）体育科

体育に関して現場に蔓延する先入観を改めて問い直すことが，大きなねらいであった。

例えば，「体育は人気がある」とか「体育はみんなが喜ぶ」などは，よく耳にする言葉である。しかし，本当にそうであろうか。声の大きな者が「好き」と言っているだけで，本当は大嫌いな子が声にできないだけではないのか。

また，「体育で規律を身につける」と言う人もいる。確かに，教室で行う授業とは明らかに学習環境が変わるため，体育授業での約束事は必要ではあろう。ただし，規律を身につけるために体育があるのではない。この優先順位を勘違いしている教師は，やたらとお説教の時間が長い。

さらに，「指導とは師範すること」だという実技能力偏重の指導観，師範を見せてもできない子は当然成績が下がるという児童観，跳び箱の段数が多いほど技能が高いと考える教材観，ゲームの印象だけで平然と成績をつけられる評価観，などなど。

これら体育科が抱える課題すべてに応えられたとまでは言えないが，解決のための視点や手立てを投げかけた。忙しい現場にあって，日々ルーティンで流されていくだけではなく，我々の指導によって子どもたちにどのような力がついているのか，子どもの姿から真摯に学べる教師が増えてほしい。そのためにも，まず当たり前を問うことは大切だと思う。

（４）図画工作科

初任者の中には，学部や大学院を卒業・修了したばかりの新卒教員から，何年も臨採を経験した教員まで様々なキャリアの人達が含まれる。そこで本稿（担当執筆部分）では，新卒教員にとっては図画工作科授業づくりの道標となるように，そして経験者には見落としがちな観点を再認識できるように内容を選定した。

本稿の特徴は，図画工作科指導における実践知をグラウンデッドにまとめ，理論化しようとした点にある。理論と実践との往還を考えた場合に起こりがちなことは，理論を実践に落とし込めない，もしくは実践が理論に高まらず方法論的レベルで終結してしまう点である。そこで，本稿では初任者の日常的な教育活動の流れや在り様を想定し，現実から遊離しない，例えるなら抽象論と具体的実践の間の“中二階”に位置するような理論の提示を心掛けた。また，執筆に際しては図画工作科らしく視覚情報を多用し，視覚的支援やノンバーバルコミュニケーションの利点も同時に伝えられるよう工夫した。

図画工作科は，表現及び鑑賞の活動を通して子ども達が想像的に物事を考え，創造的に物事を生み出すこと，そして美しいものや崇高なものに価値を見いだせる情操を養うことを目的としている。初任者には，「つくって終わり」の図画工作にならないよう，子ども達が生きる力を育める確かで豊かな学びを創造していただきたい。

（５）外国語活動

外国語活動は新しく導入された領域であり，初任者自身が小学生であった時に英語活動（名称は各学校単位で異なる）を体験した者もいれば，体験しなかった者もいる。また，たとえ体験していたとしても，学校裁量において実施されていた当時と，外国語活動として学習指導要領でその目標や内容が規定された現在とでは，指導者の果たすべき役割や，目指すべき目標も異なっている。そこで，外国語活動の授業のイメージが全く湧かない初任者であっても理解しやすいよう，教材研究の方法だけでなく，そもそもどのような教材・教具が用いられているのか等，基本的な情報についても詳しく述べた。また，外国人指導助手（ALT）とのティーム・ティーチング（T.T.）が行われることが多いことも他教科にない外国語活動の特徴といえる。そこで，教材研究・授業準備の段階で効果的な T.T.を行うためには，役割分担についても計画しておく必要があること，一方，ALT の支援を得られないときには，どのように視聴覚教材等を活用するかについても述べた。外国語活動は新しい領域であるからこそ，指導の HOW TO 的な書籍も多く出されている。それらに比べ，本ハンドブックにおける記述は量的には十分でないかもしれない。しかしながら，難解な理論を排除し，まずは「なんとか自分で授業を立案できた」となれるよう最低限必要な情報を紹介したつもりである。ここからさらに詳しく「なぜ○○した方がよいのだろうか」と思ったときに，さらなる専門書へと進めていって欲しい。

（池田吏志*・大後戸一樹*・永田忠道*・松浦武人*・松宮奈賀子*）

## Ⅲ　研究の成果と今後の課題

### １．研究の成果

本研究では，指導教員が初任者の授業力向上に向けた実践的な支援を行うに当たって有用なツールとして「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」を開発した。具体的には，算数科，社会科，体育科，図画工作科，外国語活動という５つの教科・領域のそれぞれについて，初任者に指導すべき実践的知識を「Ⅰ　理論」編（＝ポイント）として示した。また，「Ⅰ　理論」編を実際の授業の中でどのように生かすのか，具体的な学習指導案作成例や板書例を「Ⅱ　事例」編として挙げることによって，実践で活用可能なモデルを示した。本ハンドブックが実際に運用されることによって，初任者赴任校や指導教員が効果的に初任者への指導・支援ができるようになることが期待できる。これが，本研究の１点

目の成果である。

２点目の成果は，広島大学と広島県教育委員会との連携・協働の成果を活かし，さらに発展させることができた点である。先述の通り，本研究は，平成 25-26 年度独立行政法人教員研修センター委託事業に採択された，広島県教育委員会及び広島県立教育センターと連携・協働した取り組みの１つである「初任者支援ハンドブック（小学校）」の開発の成果を踏まえたものであった。具体的には，「初任者支援ハンドブック（小学校）」が，主に広島県が求める授業力について理論的な知識を提供するものであったのに対し，本ハンドブックは，その理論的な知識を各科目・領域の中で実践的・具体的なレベルで提供するものであった。本ハンドブックの開発により，広島県教育委員会及び広島県立教育センターとの連携・協働の成果を活かし，発展することができた。

３点目の成果は，本研究が開発したハンドブックが，大学等の教員養成機関における教員養成プログラムの改善にも寄与しうる点である。本ハンドブックでは，各教科・領域の専門家が専門知を持ち寄り，初任者が習得・活用すべき実践的知識を提供している。このハンドブックを養成段階のプログラムでも活用することで，学生たちは，教員になって各教科・領域の授業を行うにはどのような資質・能力を身に付けなければならないかを明確に意識することができる。また，本ハンドブックが示した各教科・領域の授業に有用な知識をもとに，養成プログラムの在り方を見直し，プログラムを改善することも可能である。

## ２．今後の課題

本研究では，「初任者の授業力向上のための実践ハンドブック」を開発したが，それを実際に運用するまでには至っていない。このような実践的なハンドブックは，実践現場で運用され，効果を上げることにこそ本来意義を持つものであろう。今後は，本ハンドブックを指導教員，初任者，大学教員等に対するモニタリングを実施し，本研究が開発したハンドブックの有用性を検証する必要がある。さらに，そのモニタリングの結果を踏まえ，本ハンドブックがよりよいものになるよう改善していくことも今後の課題である。

（伊藤圭子・山崎敬人・中村和世・幸坂健太郎*）

## 主要参考文献

広島大学（2015）『指導教員用 初任者支援ハンドブック（小学校）――授業力向上のために――』（平成 25-26 年度 独立行政法人教員研修センター委託事業 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム「学び続ける教員の基礎・基盤を構築する初任者研修支援プログラムの開発」成果物）

米沢崇・幸坂健太郎・竹谷浩子・鈴木由美子・井上弥・伊藤圭子・山崎敬人・中村和世・永田忠道（印刷中）「学び続ける教員の基礎・基盤を構築する初任者研修支援プログラムの開発――教育委員会・学校・大学で初任者を支えることを目指して――」『日本教育大学協会研究年報』日本教育大学協会，第 33 集